

昭和五十七年度 研究所報告

一、組織

一、所長 北西 弘（本学教授・日本仏教史）

一、主事 武田武麿（本学助教授・宗教学）

一、研究所委員会 廣瀬 早学長・訓覇曄雄文学部長・加来玄雄事務局長・大竹 鑑短期大学部長・古田和弘図書館長・高橋憲昭教授・寺川俊昭教授・福島光哉教授・山本唯一教授・友田孝興助教授・藤田昭彦助教授及び所長・主事。

一、昭和五十七年度研究班

指定研究（特定研究）

◎研究名 真宗総合研究

研究課題 「近代における真宗の展開」

代表者 学長廣瀬 早

研究員

白井元成（教授・真宗学） 大竹 鑑（教授・教育学） 小川一乘（教授・仏教学） 北西 弘（所長・教授・日本仏教史） 訓覇曄雄（教授・西洋哲学） 滋賀高義（教授・東洋仏教史） 寺川俊昭（教授・真宗学） 長崎法潤（教授・インド学） 名畑 崇（教授・日本仏教史） 幡谷 明（教授・真宗学） 坂東性純（教授・仏教学） 廣瀬 早（教授・真宗学） 福島光哉（教授・仏教学） 三桐慈海（教授・仏教学） 渡辺貞麿（教授・国文学） 安藤智信（助教授・東洋仏教史） 大桑 齊（助教授・日本仏教史） 志水宏行（助教授・社会学） 鈴木幹雄（助教授・倫理学） 武田武麿（主事・助教授・宗教学） 藤島建樹（助教授・東洋仏教史） 古田和弘（助教授・仏教学） 本多弘之（助教授・真宗学） 田中圭治郎（助教授・教育学） 若槻俊秀（助教授・中国文学） 石橋義秀（専任講師・国文学） 佐々木令信（専任講師・日本仏教史）

客員研究員

柏原祐泉（非常勤講師・函館大谷女子短期大学長）

研究補助員

一色順心（助手・仏教学） 延塚知道（助手・真宗学） 経隆優（博士課程修了生・真宗学）

◎研究名

海外仏教研究

研究課題

「海外における仏教研究の文献・資料に関する研究」

代表者

学長 廣瀬 早

研究員

小野蓮明（チーフ・助教授・真宗学） 寺川俊昭（教授・真宗学） 福島光哉（教授・仏教学） 安富信哉（専任講師・真宗学） 武田武麿（主事・助教授・宗教学）

嘱託研究員

今枝由郎（フランス国立科学センター研究員）大河内了義（ハイデルベルク国際文化交流研究所研究員・神戸大学教授）羽田信生（前大谷大学真宗総合研究所客員研究員）ベリーニ・リノ（本学非常勤講師）

研究補助員

小谷信千代（助手・仏教学）宮下晴輝（助手・仏教学）藤嶽明信（特別研修員・真宗学）ロバート・F・ローズ（博士課程修了生・仏教学）

指定研究〈委託研究〉

◎研究名

大藏經学術用語研究

研究課題

「日本撰述華嚴宗関係典籍における学述用語の研究」

代表者

学長廣瀬 晃

研究員

小川一乗（教授）鍵主良敬（教授）木村宣彰（専任講師）坂東性純（教授）福島光哉（教授）古田和弘（助教授）三桐慈海（教授）（いずれも仏教学）

研究補助員

一色順心（助手）赤尾栄慶（博士課程修了生）稲岡智賢（特別研究員）織田顕祐（博士課程在学中）（いずれも仏教学）

一般研究〈共同研究〉

◎研究テーマ 「外国語教育（学習）の思想」

代表者 岩見 至教授

研究員 岩見 至（教授・仏語学） 友田孝興（助教授・独文学） 市橋弘道（助教授・英語学）
囑託研究員 安富信哉（専任講師・真宗学） 禿 憲仁（専任講師・独語学）

◎研究テーマ 「大谷大学所蔵西藏蔵外文献の歴史的・思想的位置づけに関する研究」

代表者 小川一乗教授

研究員 小川一乗（教授） 片野道雄（助教授）

囑託研究員 ツルティム・ケサン（講師） 小谷信千代（助手）（以上いずれも仏教学）

研究補助員 兵藤一夫（大学院博士課程在学）

一般研究〈個人研究〉

◎研究テーマ 「Abhidhammasamuccaya および周辺文献の用語研究」

研究者 櫻部 建教授

研究補助員 松田和信・大津祐宣・加治洋一・中野 素（いずれも大学院博士課程在学）

◎研究テーマ 「中国征服王朝期における信仰形態」

研究者 藤島建樹助教授

嘱託研究員 笠沙雅章（京都大教授） 西尾賢隆（花園大助教授）

研究補助員 桂華淳祥（助手）

◎研究テーマ 「滋賀における葬送・墓碑形態の社会生態学的研究」

研究者 志水宏行助教授

二、「研究所報」の発刊

昭和五十六年度

第一号

- | | |
|------------------------------------|-------|
| 一、新しい研究所に期す…………… | 廣瀬 泉 |
| 〈真宗総合研究会報告〉…………… | |
| 一、大正デモクラシーと真宗…………… | 鈴木 幹雄 |
| 一、近代化批判と大谷大学…………… | 武田 武磨 |
| 一、教団の経済基盤、渥美契縁の存在——『厳華自伝』より——…………… | 藤島 建樹 |
| 〈大蔵経学術用語研究〉…………… | |
| 一、大蔵経学術用語研究経過報告…………… | 木村 宣彰 |

〈客員研究員研究報告〉

- 一、羽田信生客員研究員による「英文による清沢満之の作品解説の紹介」報告……………寺川俊昭
- 一、昭和五十七年度「一般研究」応募要領
- 一、研究所行事予定

第二号

- 一、真宗総合雑感……………訓覇曄雄
- 〈真宗総合研究会報告〉
- 一、太平洋戦争と真宗……………三桐慈海
- 一、宗政機構と両堂再建……………名畑崇
- 一、教育制度の変遷……………幡谷明
- 一、世界大戦下の大谷大学——大学新聞に見る昭和十三・十四年……………渡辺貞磨
- 一、内外開教問題……………長崎法潤
- 一、昭和五十七年度「一般研究」選考結果
- 一、研究所行事予定

第三号

一、研究所資料収集への偶感……………柏原 祐 泉

〈昭和五十七年度一般研究・共同研究〉

一、外国語教育（学習）の思想——研究目的と内容……………岩 見 至

〈真宗総合研究研究会報告〉

一、社会事業と社会活動……………志 水 宏 行

一、内外開教問題……………安 藤 智 信

一、清 沢 満 之——新しい教学運動……………廣 瀬 杲

一、敗戦後の学制改革……………大 竹 鑑

一、公的称号問題……………白 井 元 成

一、宗政と大谷大学……………小 川 一 乗

一、句仏事件とは何か……………北 西 弘

〈真宗総合研究史料年表班報告〉

一、昭和五十六年度における作業……………若 槻 俊 秀

昭和五十七年度

第四号

一、大学における研究と教育……………大 竹 鑑

一、昭和五十七年度「指定研究」研究計画紹介

〈海外仏教研究報告〉

一、海外仏教研究——その目的と内容……………小野 蓮 明

〈真宗総合研究研究会報告〉

一、近代仏教学の形成……………古 田 和 弘

〈昭和五十七年度一般研究研究内容報告〉

一、中国征服王朝期における信仰形態……………藤 島 建 樹

一、大谷大学所蔵西藏蔵外文献の歴史的・思想的位置づけに関する研究……………小 川 一 乗

一、研究所行事予定

第五号

一、研究所の現状に思う……………福 島 光 哉

〈真宗総合研究研究会報告〉

一、日本近代化過程における真宗教団……………福 島 寛 隆

〈昭和五十七年度一般研究研究内容報告〉

一、Abhidhamasamuccaya および周辺文献の用語研究……………櫻 部 建

一、滋賀における葬送・墓碑形態の社会生態学的研究……………志 水 宏 行

一、客員研究員の紹介

「天台智顗における円融三諦の研究」

ポール・スワンソン（ウイスコンシン大学・本学研修員）

一、昭和五十八年度「一般研究」応募要領

一、研究所行事予定

第六号

一、総合研究所感二題……………山本唯一

〈真宗総合研究会報告〉

一、真宗・総合・近代、そして歴史学……………大桑 斉

〈海外仏教研究会報告〉

一、北米仏教学資料収集考……………安 富 信 哉

1、Committee on Overseas Buddhist Studies—Accomplishments to Date……………ロバート・F・ローズ

〈大蔵経学術用語研究〉

一、大蔵経学術用語研究の現状……………赤 尾 栄 慶

一、昭和五十八年度「一般研究」選考結果

一、研究所行事予定

三、「指定研究」の動向

◎真宗総合研究

「近代における真宗の展開」

「近代における真宗の展開」を研究課題とする真宗総合研究は、そのまとめの年として、昨年度の真宗総合研究所における「指定研究」に指定された。それをうけて研究班は、年度の初めに二回にわたる全体会議を開き、そのまとめの作業をいかに推進していくかを検討した。その結果、大略つぎのような方法でまとめていくこととなった。

まず、近代という時代区分を「明治期」、「大正・昭和前期」、「昭和後期」の三つの時期に分け、それぞれの時期をまた「教学」、「大学」、「教団」の三つの視点でおさえていく。そしてそれぞれの時期および視点に立つての研究会を重層的に開催し、その中で各時期・各視点別の通史をまとめていく作業を最終的に進めていく。またそれらの通史をまとめていく参考資料とするために各研究員は、これまで過去三年間それぞれ分担して研究をおこなってきた歴史的事項についての研究成果をまとめた報告書を提出する。

まとめの作業は、このような方法に則って推進された。各研究員からは、例えば「護法運動」、「清沢満之―新しい

「教学運動―」、「大正デモクラシー」、「同朋会運動の胎動と展開」、「近代化批判と大谷大学」等々の歴史的事項についての報告書をはじめ、多数の報告書が提出された。研究班は、これらの報告書や参考資料をもとに各時期および各視点別の研究会を幾度も開催してきた。今その一々の研究会については省略し、特に各通史をまとめていくうえでの総合化を計ることを目的として開催した研究会の中から視点別におこなわれた主なものを挙げておく。

その視点別研究会の主なものとしては、まず「大学」を視点において、本学名誉教授の藤島達朗・舟橋一哉そして多屋頼俊の三氏に「大谷大学を語る」と題して、昭和初年頃の大谷大学的情況を中心に語っていただく研究会をもった。また「教学」を視点においては、大谷高校教諭の福島和人氏に「近代真宗思想についての二・三の問題提起」と題し、そして「教団」を視点には、龍谷大学助教授の福島寛隆氏に「日本近代化過程における真宗教団」（研究所報No 5にレジメ掲載）と題してそれぞれ講演をいただき研究会を開いた。さらにまた「総合」を視点に、本学助教授の大桑斉氏に「真宗・総合・近代、そして歴史学」（研究所報No 6にレジメ掲載）のテーマのもとで研究発表を行っていただいたりしてきた。

研究班は、これらの研究会等々と並行しながら各時期および各視点の通史をまとめる作業を推進してきた。またその間に編集委員会を三回にわたって開催し、通史をまとめていくための具体的な方法等の検討もかさねてきた。そして現在、そのまとめの作業も既に最終段階にまでいたっている。

また一方、史料年表班も、年度の初めに数回にわたる会議を開き、まとめの方法を検討した。その結果、年表作成にあたっては、年表が浅薄なものになるのを避けるために一挙に広く資料を網羅することをやめ、採録の範囲を『宗報』類だけに限定して作業を推進することとした。

作業内容は、真宗教学研究所編の『近代大谷派年表』をベースにおき、まずその『近代大谷派年表』から明治以降の各項目をすべて「項目カード」に作成することからはじめた。つぎに明治以降から現在に至るまでの『宗報』類をすべて収集し、これに所載されてある関連記事と、『近代大谷派年表』に所載されてある各項目との照合確認をおこなってきた。さらにその照合確認の作業の中で、『宗報』類から『近代大谷派年表』に採録されていなかった関連事項をも可能な限り採録し、カード化してきた。そしてそのカードには、将来的な有効利用をも考慮し、記事所載の該当号数・年月日・所在頁数等を明記した。この作業は、現在ほぼ完了している。

また史料年表班は、この年表作成の作業と同時に、資料収集の作業をも進めてきた。特に昨年度は学事に関する資料収集に傾注した。

そして『真宗大谷大学一覧』をはじめ、『大学寮條規』、『高等学事史料』、『大谷派本願寺史』等々約五十数点の、近代における真宗の展開をおさえていくうえでの基本的な資料を収集した。その収集した資料については、それぞれの制度・講義・典籍・人物・事項の五つの視点で線引きをして抜き出し、それらを年代順に整理した。同時に、これらの資料の内容を解読し、それぞれの資料について、その資料が語っている内容をおさえた「資料整理表」を作成してきたことである。

研究成果のまとめの作業を推進してきたこの真宗総合研究は、年度末までに概略このような段階まで結集されてきた。そしてこの真宗総合研究は、昨年度を以て終結をしたが、全体の最終的集約はまだ終わっていない。

しかしながら、この近代における真宗の展開史の概観をまとめる作業を通じて、新たに推進し、より一層具体的な成果を求むべき事柄が明確になってきた。それは具体的に言うならば、学事に関する基礎的資料の収集と、学事の展

開を通観できる歴史記述の必要性ということである。この成されるべき事柄として明確になってきた課題が発展的に継承されて、本年度より新たに「真宗学事研究」として組織され、その研究が推進されることとなったのである。

「真宗学事研究」は、もちろん学事に関する資料の集積を主目的とするものではあるが、それは必然的に自ずと現在の大谷大学の歴史的位置づけを志向するものとなる。従つてそれはまた、既に成されてしかるべきであつた本学の三百年史の編纂のための基礎的作業をも伴うものとして将来的展望をひらいていくものといえよう。

〈研究会〉

一、六月二十二日（火）……………本学名誉教授 藤 島 達 朗

「大谷大学を語る」——昭和初頭の大学騒動を中心にして——

一、六月二十三日（水）……………本学名誉教授 多 屋 頼 俊

「大谷大学を語る」——昭和初年頃の思い出——

一、六月三十日（水）……………本学名誉教授 舟 橋 一 哉

「大谷大学を語る」

一、七月六日（火）……………大谷高校教諭 福 島 和 人

「近代真宗思想についての二・三の問題提起」

一、七月八日（木）……………龍谷大学助教授 福 島 寛 隆

「日本近代化過程における真宗教団」

一、十一月三十日（火）……………本学助教授 大 桑 斉

「真宗・総合・近代、そして歴史学」

(研究補助員 経 隆 優 記)

◎海外仏教研究

「海外における仏教研究の文献資料に関する研究」

これまでになされてきた仏教学・仏教研究は、真に「仏教を学として解放する」(『大谷大学樹立の精神』)ものであったかどうか。これは、少くともわれわれ大谷大学の研究者にとって、明言されたものとしては唯一の批判点である。そしてまた、この批判点そのものを確にすることの困難をも十分に承知している。それにもかかわらず当研究は、「仏教研究の研究」という性格を運び、「海外仏教研究」という名のもとに発足した。第一年が経過した。以下はその初年時の報告書である。

当研究は、文献目録・研究会・資料検討会の三つを軸にして進められた。この三つの軸にそって順次報告する。

〈文献目録〉

この研究が初年時の最も重点的な課題としたのは、北米における仏教研究の文献目録を作成することであった。これまでに出版されている種々の文献目録(主要なものとしては、*Guide to the Buddhist Religion*, Frank E. Reynolds, ed., Boston, G.K. Hall, 1981; *Bibliography of Asian Studies*, Ann Arbor, Association for Asian Studies; *International*

Bibliography of the History of Religions, Leiden, E.J.Brill を挙げる(ことができる)から抜き出したものに、更に関係諸雑誌を精査して完全に期した。一九八三年三月までに、研究論文二、五六〇件、研究書六四〇件についてのカード化した目録が作成された。一九六〇年以降の北米における仏教研究は、これでは網羅されたといえる。しかし更に不備を補うため次年時にも継続されねばならない。

また上の作業と並行して、北米で出版された研究図書及び研究誌の収集をも行った。四〇〇件の発注のうち、八〇件を入手している。更に北米の諸大学に提出された博士論文をも収集した。関係論文すべてではないが、University Microfilms Inc. of Ann Arbor, Michigan を通じて入手可能なもののうち、一九七三年以降のものはすべて入手し、一一一件の博士論文が閲覧できることとなった。

〈研究 会〉

定例の研究会は、海外における大学の仏教研究の事情を知るため、海外の諸大学を訪ねられた方々を招き、海外の仏教研究者たちや、仏教研究のプログラム等について話していただき、研究員との間に意見交換がなされた。

一、一九八二年五月二〇日 福島 光 哉(研究員 本学教授)

「ウイスコンシン大学における仏教研究の事情」……

二、一九八二年六月一七日 William Kurtz (前客員研究員)

「アメリカ仏教研究の現状——私の個人的体験を通して——」……

三、一九八二年七月一九日 Robert F. Rhodes (研究補助員)

「バークレイ大学とハワイ大学の仏教学について」

四、一九八二年九月二二日 梶 山 雄 一（京都大学教授）

「アメリカの仏教事情——大学と研究所——」

五、一九八二年一月二六日 安 富 信 哉（研究員 本学専任講師）

「アメリカ仏教学散見」

六、一九八三年一月一二日 白 土 わ か（本学教授）

「フランス仏教学の動向、ならびに『全欧日本学会第三次会議』についての管見」

〈資料検討会〉

海外における仏教研究の実際、その研究方法等を学び批判的に検討するためにこの会が設けられた。初年時は特に、浄土教の研究に焦点を絞り、以下の論文を取り挙げ討議した。

一、一九八二年一〇月二六日 Julian F. Pas : "Shan-t'ao's Interpretations of the Meditative Vision of Buddha Amitāyus", *History of Religions* vol.14, No.2 (1974)

報告者 宮 下 晴 輝（研究補助員）

二、一九八二年一月二日 David Chappell : "Chinese Buddhist Interpretations of the Pure Lands", in Michael Saso and David Chappell, eds., *Buddhist and Taoist Studies I* (Honolulu : University Press of Hawaii, 1977)

報告者 Robert F. Rhodes (研究補助員)

三、一九八二年一月一六日 Hongwanji International Center : *Notes on "Essentials of Faith Alone", A Translation of Shinran's Yuishinsho mon'i* (Kyoto : Hongwanji International Center, 1979)

報告者 藤 嶺 明 信 (研究補助員)

四、一九八二年二月二日 Allan Andrews : "The Meaning of the Eighteenth Vow : A History of Religions Approach", in Ishida Mitsuyuki Hakase Koki Kinen Ronbunshu Kanko Kai, ed., *Jodo Kyo no Kenkyu* (Kyoto : Nagata Bunshodo, 1982)

報告者 萩 原 晃 俊

五、一九八三年一月二五日 Minoru Kiyota : "Buddhist Devotional Meditation : A study of the *Sukhāvatīyūhopadēsa*", in Minoru Kiyota ed., *Mahayana Buddhist Meditation : Theory and Practice* (Honolulu : University Press of Hawaii, 1978)

報告者 一 樂 真 (大学院生)

(研究補助員 宮 下 晴 輝 記)

◎大藏經學術用語研究

「日本撰述華嚴宗關係典籍における學術用語の研究」

大藏經學術用語研究會は、昭和五十六年度より「日本撰述華嚴宗關係典籍における學術用語の研究」という研究課題のもとに、八名の研究員が四名の研究補助員の助力を得て研究を進めてきた。この研究は『大正大藏經』七二・七三・七四卷に所収の華嚴宗關係（戒律關係をも含む）の諸典籍について、學術用語の分類研究および總索引の出版を目的とするものである。すでに大谷大学大藏經學術用語研究では、昭和三十六年以来、インド撰述部索引三冊、中国撰述部索引三冊を刊行するに至っているが、日本撰述部に関しては本研究が最初の試みであった。『大正大藏經』に含まれる日本撰述の華嚴宗關係典籍は、奈良朝の壽靈から江戸時代の鳳潭・普寂まで二十数点に及び、数多くの華嚴宗典籍の中でも各時代の代表的な書物が編入されている。約二年を費したところの學術用語の選定や分類研究は慎重な配慮をもってなされたのであるが、その場合にもっとも基本となるものは嚴密な解読研究であり、『大正大藏經』テキストの正確な解読を通さずしては學術用語の研究は不完全なものにならざるをえない。

『大正大藏經』所収のインド撰述および中国撰述の諸典籍に関しては、主に『高麗版大藏經』を底本とし、加えて宋元明の三本との校合が施されている。しかし日本撰述の場合は照合すべきテキストが、各地に散在する古寺や仏教系大学の図書館に所蔵の写本および和刻本などをたよりとしているために、各テキスト間に文章上の異同が生じ、解読作業の嚴密化を困難なものにしている。本研究の中で取扱った華嚴宗關係典籍においてもテキストの校合上の問題点が見出された。足利時代の学匠靈波が『五教章』三卷を問答形式をもって解釈した『華嚴五教章見聞鈔』八卷は、『大正大藏經』所収本では高野山正智院所蔵の古写本を底本としている。ところがこの古写本とは別系統の流れを汲むと思われる古写本が大谷大学図書館に存し、これとの校合によってより完本に近いテキストの復元が可能になるとが判明した。また普寂の著書である『華嚴五教章行秘鈔』五卷について、和刻本との照合作業を行なった結果、『大

『正大藏經』所収本には、卷三の終わりの部分に約四〇〇字の欠落が発見された。この欠落を指摘しえたことによつて、以後の『大正大藏經』七三卷にその部分の増補が活字化されるとともに、欠落箇所用語をも含めたかたちで総索引の編集を行なうことになった。

日本に『華嚴經』および中国の華嚴宗典籍が伝来したのは奈良朝に始まり、当初は南都の学匠によつて註解研究がなされた。とくに華嚴の宗義を五教の立場から闡明した法蔵の『五教章』が日本に齎されてより、この書物がしばしば講学の対象となり、多数の註釈書が著されつづけた。このような長い研究の歴史をもちながらも、日本撰述の華嚴宗典籍の研究はいまだ未整理の研究分野であるといえる。本研究に含まれる諸典籍の學術用語研究にさいしては、とくに華嚴宗の多岐に亘る学系や中国華嚴宗の教学にも充分に考慮が払われることを必要とする。たとえば、『五教章通路記』を著した凝然と『華嚴信種義』の著者高辨は、各々が独自の学風を形成し華嚴宗の二潮流とも称すべき学匠であつたが、東大寺系と高山寺系というような二つの華嚴の流れが別個に存したのではなく、彼ら以前にも以後にも思想交流が少なからず保たれていたと考えられる。

また寿靈から普寂までの幾多の『五教章』註釈書には中国華嚴宗の智儼・法蔵・李通玄・慧苑・澄観・宗密などの著作が豊富に引用されている。これらの思想の受容過程および受容方法にそれぞれ異同があり、そのような観点からも日本華嚴宗の系譜の一端が明らかになる。たとえば法蔵の弟子慧苑の思想は、後の澄観によつて厳しく排斥されたものであるが、現存最古の『五教章』註釈書である『華嚴五教章指事』には慧苑に対する批判的見解は見出せない。また華嚴宗の傍系とされた李通玄についても、日本においては高辨などの教学に多大な影響を与えたほどである。さらに『五教章匡真鈔』を著した江戸時代の鳳潭に至つては、従来の『五教章』註釈家が澄観・宗密や宋代の末註に依つ

て解釈する研究態度を批議し、智儼・法藏の師説に帰るべきことを提唱した。これらのように、華嚴の教学理解において日本の華嚴教学の歴史には、中国華嚴とは異質で様々な受容と変容の過程のあることが明らかになったのである。

日本の華嚴宗関係典籍における上記のごとき研究内容をふまえて、『大正大藏經』三冊分に含まれる學術用語の総索引の作成作業を行なった。學術用語の選定に時間を要して五七年度の半ばまで掛ったことになる。そのために以後の分類研究や原稿化の作業が過密なスケジュールの中でとり行なわれた。しかし五八年四月末にはほぼ全原稿の完成をなし、先般、出版社へ原稿を搬入したところである。まもなく五十音索引の部分から順次、校正作業を開始し、本年度の末にはこの研究成果が『大藏經索引・統諸宗部二』として刊行される運びになっている。

學術用語研究会では、さきの研究と並行して「浄土教関係典籍における學術用語の総合的研究」という研究課題を設定し、昨年の秋よりその研究準備を進めてきた。この研究は『大正大藏經』八三・八四卷所収の日本撰述の諸典籍における學術用語研究を行なうものであり、主に神戸和麿研究員が大城邦義研究補助員等の助力を得て問題点の検討と部分的な選定作業が進行中である。

執筆者紹介

研究員	岩見至	………	本学教授	仏語学
研究員	櫻部建	………	本学教授	仏教学
研究員	市橋弘道	………	本学助教授	英語学
研究員	友田孝興	………	本学助教授	独文学
研究員	藤島建樹	………	本学助教授	東洋史学
研究員	禿憲仁	………	本学専任講師	独語学
嘱託研究員	安富信哉	………	本学専任講師	真宗学
研究補助員	桂華淳祥	………	本学助手	東洋史学
研究補助員	松田和信	………	本学特別研修員	仏教学
研究補助員	ロバート・F・ローズ (Robert F. RHODES)	………	本学非常勤講師	仏教学
客員研究員	ポール・L・スワンソン (Paul L. SWANSON)	………	ウイスコンシン大学博士課程 ウイスコンシン大学教授	仏教学
清田実 (Minoru KIYOTA)	………	ウイスコンシン大学教授	仏教学	